

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「中東・イスラーム研究における人類学 — 湾岸というフィールドから」

大川 真由子 (神奈川大学)

#### 【発表要旨】

中東・イスラーム研究において人類学者はマイノリティであるのと同時に、湾岸をフィールドとする研究者も少ない。本セミナーでは、湾岸研究をとりまく現状を紹介し、湾岸をフィールドとする人類学者としての「生きづらさ」と「気楽さ」についてお話した。

はじめに、「湾岸」という研究対象地域は伸縮可能な概念であることを示した。字義通りにはイラン、イラクを含む「ペルシア(アラビア)湾岸諸国」となるが、よりローカルな用法では GCC6 ヶ国を指すのが一般的で、君主制をとるアラブ産油国とほぼ同義となる。GCC 各国は共通点が多いことから、「湾岸人(khaliji)」という一枚岩的な表象を生み出しているのと同時に、彼ら自身もそうしたアイデンティティをもつ。その反面、宗派や歴史の面では多様であり、それに基づいた国民アイデンティティも醸成されてきたのである。

つぎに、湾岸研究動向を振り返り、湾岸研究者(とくに人類学者)が少ない理由を提示した。大きな理由としては、政治的要因による研究への規制が強かったということが挙げられる。政治や民族、社会問題に関する研究は現在でも難しい。人類学的研究に関していえば、第一に聖者信仰などイスラームの人類学の研究対象になるような民間信仰が制限されていること、都市国家なので人類学が得意としてきたコミュニティ研究が難しいこと、外国人割合が極端に高い湾岸にあつて、「現地人の視点から」を信条とする人類学的研究との齟齬が、その研究の少なさの理由として挙げられる。少ない人類学的研究のなかでも、近年急増している移民やトランスナショナリズム研究からは、中東に位置しながらも、インド洋交易ネットワークの一部を成す「湾岸」という認識・地域概念が浮かび上がってくる。湾岸は古くからアラブ世界の中心地よりもインド洋にその視線は向いていた。それは現在になっても変わらない。かつてはアラビア半島からインド洋に向けて人が出て行ったのが、現在は逆にインドや東アフリカから出稼ぎ労働者が湾岸にやってくる。

最後に、人類学と地域研究のアプローチの違いについて述べた。人類学には(域外)比較の視点が重要であること。それは特定地域(国家)の総体的理解や域内比較を目的とする地域研究との大きな違いである。発表者は、これまで 19 世紀中葉のオマーン帝国の拡大にともない、オマーンから東アフリカに渡り、1970 年代以降オマーンに戻ってきた移民を主要な研究対象としてきたが、この東アフリカから戻ってきた人びとを、日本の引揚者やアルジェリアからフランスへの引揚者の民族誌的事実と比較することで、「帰還」という概念を批判的に見直すのと同時に、地域を越えた人類社会の多様性と共通性を見いだすのである。

湾岸は中東のなかでも注目度が低く、研究者が少ない。湾岸を研究するうえでの「生きづらさ」は多々

あるが、他の中東諸国と異なるのは、一国の規模が小さく、かつ自国民が極端に少ないという点である。だからこそ、「外」(国内の外国人、隣国、インド洋、東アフリカ)へと視線が向かうのではないか。研究者にとってフィールド選びは一大事である。人類学でありながら「現地人」ではなく外国人を研究する、イスラーム地域でありながらイスラームの人類学的研究が少ない、中東でありながらアフリカやインドに目が向くというのも、湾岸というフィールドの特徴なのである。